

171 ドライバー遺伝子肺癌の薬剤感受性メカニズムの解明

武田 真幸

ドライバー遺伝子変異陽性肺癌に於いて、分子標的薬の効果は未だ限定的であり、新たな治療ストラテジーの構築が必須である。本研究では、EGFR 阻害剤であるゲフィチニブ、エルロチニブ、アファチニブの有害事象の発現率に違いがあるかどうかについて統合解析を実施した。Grade 3 以上の肝障害は、ゲフィチニブ、エルロチニブ、アファチニブの順に認められ、皮疹および下痢は、その逆の傾向が示された。このような結果は、EGFR 遺伝子変異陽性肺癌の治療ストラテジーを考慮する上で役立つと考えられる。

EGFR 阻害剤別 Grade3 以上の有害事象 (A) 肝障害、(B) 皮疹、(C) 下痢、(D) 肺臓炎 \*P<0.05

